

むかし、あるところに、働きものの若者がいました。
ある日のこと、きれいな娘が若者のうちにやってきて、
「わたしを嫁さまにしてくださいませんか」といいました。

若者は、びっくりして、

「あなたのようなごの大家たいかのお嬢さまかわからないきれいな人を、こんな貧乏な家に
もらうわけにはいかん」といってことわりました。娘は、

「いえ、貧乏はかまいません。ぜひとも嫁さまにしてください」といいました。若者は、
「では、年を切つて、嫁にもらいましょう」といいました。ずっといつまでもではなく、
年数を限つて嫁にもらうということです。

嫁さまは、かしこい嫁さまで、ふたりは幸せに暮らしました。

そのうち、じきに年が明けてしまいました。嫁さまは、

「やくそくの年数がたったから、おひまをいただきます」といいました。

若者は、

「行つてもらつては困る。行かずにずっとここにおつてくれ」と頼みました。けれども、

嫁さまは、

「いいえ、始めに年を切られてしまったから、どうしようもありません、おひまをくだ
さい」といいました。そして、若者にユゴの木をわたして、

「じつは、わたしは天人です。これから天に帰りますが、きつとまた会いましょう。ど
うかこのユゴの木を庭に植えてください。百日たったら木は天につつかえるでしょう。

そうしたら、木をつたつて上がつてきてください」といいました。そして、すうつと天
にのぼつていきました。

若者は、家のわきにユゴの木を植えて、毎日毎日待ちました。待ちかねて、九十九日
目が上がつていきました。百日といわれていたのに、九十九日目に行つたので、あと少
しで天に届きませんでした。嫁さまは、それを見て、長い髪の毛をほぐしました。そし
て、

「これをつかんで上がつてきてください」といって、髪の毛を天からぱつと投げました。
若者はその髪の毛をつかんで上がつてきました。そして、嫁さまの家に行つて、いっし

よに暮らしました。

ふたりは、天の畑を耕して、仲良く暮らしました。

ある日、若者は、野良へ出かけるときに、嫁さまにいいました。

「庭にきゅうりがたくさん生っているけど、とつてはいけないよ」

昼ごろ、嫁さまは、

（何もおかしはないし、『とるな』っていわれたけど、庭のきゅうり、一本とつて食べよう）と思いました。きゅうりをとつて、ほうちょうでごつと切ったら、切ったところから大水が流れだしました。水は、どんどん流れて、畑で働いていた若者を押し流しました。若者は、

「助けてくれ、助けてくれ」とさげびましたが、どんどんどんどん流されていきます。

嫁さまは、助けることができません。嫁さまは、

「せめて年に一度、七月七日に会おうなあ」とさげびました。

それが、たなばたの日です。七月七日に、切ったきゅうりを水に流して無事を祈れば、

水の難から逃れるとあって、むかしの人はきゅうりを水に流したそうです。

おしまい

村上郁 再話

資料 『奈良県吉野郡昔話集』 国学院大学説話研究会

